

退任講演：愛知学院での研究・教育を振り返って

玉井 金五

1 はじめに

私は1980年から2014年までの34年間を大阪市立大学（現大阪公立大学）経済学部で、また2014年から2022年までの8年間を愛知学院大学経済学部で過ごしました。計42年間もの教員生活を送ることができたわけです。前任校では最終講義「社会政策研究・教育40年」と題するお話をさせていただき、それは機関誌『経済学雑誌』第115巻第3号（退任記念号）に掲載されました。本日は、愛知学院の退任にさいして特別な場を設定していただき、感謝しています。折角の機会ですので、この8年間の研究と教育を振り返ってみたいと思います。

2 研究初期の回顧—私の原点—

まずは研究に関することをお話いたします。すこし古くなりますが、私の原点となった昔の出来事から始めさせていただきます。それは学部学生時代（岡山大）にまで遡ります。学部2年生のとき、経済学史を担当されていた羽鳥卓也先生と出会いました。講義内容はスミス、リカードウ、マルサスといった古典派経済学の学説ですが、実に明快で興味深く、それこそ生まれて初めて「頭脳に染み通る」と表現してよい授業を受けることができたのです。本当に面白いと思いました。この講義がきっかけで経済学を創成期の18世紀から考えるようになり、それはその後の私自身の研究において何世紀にも跨がる長期的視点を形成することに繋がっていきます。羽鳥先生が経済学は「歴史認識の基礎科学」と言われていましたが、まさにその真髄を早くから学ぶことができました。

研究を進める上で、指導者としての先生以外にも研究者仲間は重要な存在です。私は大阪市立大学の大学院修了後にそのまま経済学部で奉職し、そこで杉原薫さんという方と同僚になります。この世界に優秀な研究者はたくさんいますが、若手でこれほどスケールの大きな研究者に接するのは私にとって初めてで、その迫力に圧倒されました。杉原さんは当時まだ新しい分野であった「アジア経済史」を専攻されており、アジア交易圏の史的構造を実に新しい視角から解明されようとしていました。経済史といえば西欧中心の時代でしたが、そのときからそれを相対化し、独自の世界経済史像を構築しつつあったわけです。その後における杉原さんの国際的な活躍はよく知られており、現在グローバルヒストリー研究の第1人者だと評価されています。杉原さんとの出会いも私にとって決定的な意味を持ちました。

研究に関してもう一つ触れておきたいのが、私のイギリス留学です。1985年から1年間ロンドン大学ゴールドスミスカレッジで学ぶことができました。私を指導してくれたのは、P. Thane という女性研究者です。セイン先生はイギリス社会史、女性史の専門家で、イギリス福祉国家の成立過程を19世紀から追究していました。ともすれば理想的な形で描かれがちなイギリスの事例ですが、彼女の分析はあくまで史料に忠実で、あらゆる領域に目配りして事実関係を掘り起こしていく、そして説得力のある考証結果を導き出すという、その高度な手法は見事なものでした。私は早くから彼女の業績に注目していたこともあって、迷わず師事したわけでありませう。セイン先生にはマンツーマンのセミナーで1年間みっちり鍛えられました。

このように、私は研究者としての初期に非常に恵まれた環境を享受することができました。学問とは何かを早くから知ることができ、まさに私にとって原点となったわけです。このときに身に付けた研究スタイルはその後の私の土台となり、今日に至るまで揺らぐことなく続いてきています。

3 愛知学院での研究

愛知学院も研究ができる素晴らしい環境を提供してくれました。それによって新しい成果を出すこともできました。そのなかで挙げるとすれば、何といても10年前に出版した著書『共助の稜線』（法律文化社、2012年）の増補版を刊行することができたことです。私の専門である社会政策論は我が国でも1世紀以上の歴史があります。それを振り返ると、現在でも無視できない思想・学説をはじめ、たくさんの財産が残されており、アジアレベルでも唯一社会政策の豊かな伝統を有する国だといえるでしょう。しかしながら、そうした独自性を有した研究蓄積を消化吸収しない研究者が増えてきていると思います。私の著書は20世紀の日本における福祉系の社会政策を扱っていますが、制度自体が極めて経路依存性の強いものであることを訴え、そこに日本の特質が存在するとしています。そのため社会保障制度一つを取ってみても岩盤のように構築されており、容易に改革はできないところがあります。我が国では福祉面で評論家的な見解がいつも幅を効かせていますが、本書はそうした表面的な論調に警告を発しています。

一方、2016年あたりから、私は誘いを受けて一橋大学に設置されている福田徳三研究会のメンバーになりました。福田は日本の経済学の創成者ともいわれており、我が国を代表する経済学者です。その著作集（全21巻、信山社）の編纂、刊行が研究会に課せられた任務です。福田の学問的守備範囲は実に幅広く、それこそ古代から近代にまで及び、しかも国際的な視野を堅持しながら自説を縦横に展開しています。我が国でも福田といえば生存権思想を中心によく知られており、それこそ「福祉国家論の先駆者」だと位置づける論者もいるほどです。参加メンバーは経済学だけでなく、法学、政治学等に跨っており、それは福田の学問体系の大きさを物語っています。私は第11巻にあたる『社会運動と労銀制度』の編纂に従事し、2019年にそれ

を刊行することができました。

他方で、私は「大阪社会労働運動史」の編纂にも長年関わってきました。現在最終巻となる第10巻編集の共同代表の一人として約60名の執筆者が参加するプロジェクトを率い、鋭意作業を進めています。刊行は2024年を予定しており、これで約40年間続いてきた運動史シリーズの出版はここで一旦終了となります。明治期からの歩みを社会・労働面だけでなく、行政、産業、経済、技術等関連分野も視野に収めており、その包括性は十分実質を備えていると思います。ちなみに、こうした形で運動史を刊行しているのは全国的にみても大阪だけでしょう。すぐに役立つというものではありませんが、後世に残しておくべき重要な文献・資料であり、その仕事に当初から関与できたことを大変ありがたく思っています。

ここで国際会議参加についても一言ふれておくことにします。私が若いときと比べて、国際会議の開催頻度はすさまじいものがあります。国際会議に参加し、報告するためには事前にペーパーを執筆して送らなければいけません。英文で書くことに加えて、外国人がわかるように工夫もしなければなりません。したがって、出発前のプレッシャーは相当大きなものがあります。しかし、無事に報告を終えた爽快感は一度味わうと以後何度もチャレンジしたくなります。私もこれまでできる限りエントリーするように努めてきました。とくにここ10年以上は日中韓の社会保障国際会議がメインでした。以前と異なって3カ国の交流は著しく進展しています。私は、この会議も含めて2014年から計9回中国や韓国を中心に回りました。2017年には、中国東北部の長春にある東北師範大学で大学院のセミナーを担当させていただき、国際会議とは違った思い出となる経験を積むことができました。

4 愛知学院での教育

もう一つの柱である教育についても述べておきたいと思います。それまで勤務していた大学は公立大学で、定員も少なく、少人数教育が可能でした。しかし、私学となると、そうはいきません。それでも愛知学院の経済学部は1学年250名定員ですから、恵まれています。ただし、それに比べて教員定数は決して多いとはいえません。その意味で、少しでも増えることを願うばかりです

まず「講義」ですが、最初は苦勞しました。初めて受け持った春学期はうまくいったと思ったのですが、受講生による評価は厳しいものがありました。結構自信があったので、ショックでした。主な理由は進め方が速すぎるというものです。そのため、秋学期からはスピードダウンして1回分の講義分量を3分の2程度に減らし、話し方もできるだけゆっくり行うように心掛けました。その結果、秋学期の評価は大幅に改善されました。その後は、そうしたペースを維持するように努めましたので、ほとんど問題なくやれたと思います。なお、私の期末試験は論述中心です。大学生ですから当然だと思います。解答内容は初めのうち必ずしもよくはなかったのですが、論述の意味を説くことで、成績は随分アップしていきました。

問題は「専門講読」という科目です。これは外国書講読に当たります。経済の専門書を英語で読もうということですので、専門用語の訳出に注意しなければいけません。しかし、そのまゝに学生の間で英語力のバラツキが大きく、苦戦しました。英語が苦手な学生はほとんど予習をしてこないのが、授業を受けていても効果はありません。多分、それまでのどこかで英語の壁にぶつかり、以後は自然に遠のくということになったのでしょう。指導面でできるだけのこととはしたつもりですが、最後までいろいろと悩んだ科目でした。経済の専門書にチャレンジできる英語力の基礎をまずは付けることが課題のようです。

最後に「ゼミナール」です。私は前に居ました大学時代から「甲子園方式」を唱えてゼミの運営を行ってきました。先生は監督、ゼミ生は選手です。目標は「4強」に入ることです。1年目は基礎学力養成、2年目は実力発揮というコースが用意されます。チーム力を鍛えるために、教室内の学習に加えて施設や企業の見学を行い、現場を体験させます。また、他大学との交流も大切に、中部経済学インターゼミにも毎年連続して参加してきました。他方で、2017年のとき、社会政策学会全国大会を本学名城公園キャンパスで開催しました。このとき、ゼミ生は学生委員として全員が大活躍してくれました。ゼミ生にとって学会とはどういったものかを知る絶好の機会になったと思います。そうしたさまざまなプロセスを経ることによって、ゼミ生も年を追うごとに力をつけていきました。実績として、全員の就職決定はもちろんのことですが、卒業時に成績優秀者が対象となる管長賞（首席）2名、小出賞（2位）1名、学長賞（3位）4名、計7名が6年間に受賞しました。

5 おわりに

今日、大学間競争が激化しています。とくに東海地区は熾烈です。東京とか関西はおおよその分布ができており、見かけほど厳しいとはいえない気がします。それに比べて、東海地区はまだ流動的なせいか、私には極めて激戦区のように思われてなりません。かつて当該地区は有力私学として「愛愛名中」という括りがありました。愛知大、愛知学院大、名城大、中京大です。それがいつのまにか、「南愛名中」に変わっています。ここでの「愛」は愛知大です。愛知学院がこれまでの枠から出てしまいました。これは誠に残念なことです。なぜそうなったのかよく考えてみなければいけません。

私には新しい戦略に基づく必要な改革がなされてこなかった面があるのではないかと思います。たとえば、看板となる学部の育成です。理工系が強いとか、国際系が優れているとか、大学によって売りがあります。本学の場合、それが薄れてしまいました。私は今後リーディングファカルティとなる可能性を一番秘めているのは経済学部ではないかと思います。歴史が新しく、しがらみがありません。しかも女性教員が多く、本学の社会科学系では突出しています。また、東海地区の私学をみたとき、経済系は全般的に地味な気がしますので、なおさら飛躍のチャンスです。もっとも、大学の改革には時間がかかります。しかし、目標に向けて今から粘り強

く推し進めていくしかありません。

いずれにしても、大学構成員である教員、職員、学生のすべてがレベルアップしていくことが肝要です。どれ一つ欠けてもいけません。全体的に向上しますと、空気が変わります。よい組織には必ず相互の刺激や緊張感があります。経済学部の将来に対する期待はあまりにも大きなものがあり、それを今後見守っていきたいと思います。

在任中大変お世話になりました。

本当にありがとうございました。

（2022年3月1日）